



第 175 号

二〇二四年一月二日発行  
発行者 奈良県立  
橿原考古学研究所  
奈良県橿原市畷傍町一番地  
編集者 清水康二

# ヒシヤゲ古墳出土埴輪の胎土分析

東影 悠・廣瀬 覚・田村朋美・柳成煜

## 一. はじめに

佐紀古墳群東群での埴輪の生産・供給の実態を明らかにするため、ヒシヤゲ古墳出土埴輪の胎土分析により、平城宮東院下層窯等の埴輪との比較検討をおこなうこととなった。ヒシヤゲ古墳では一九九二年度に後円部の東側で内堤を発掘調査し、内堤上の外縁を区画する円筒埴輪列を抽出した。今回、分析対象としてサンプルを採取した埴輪片二〇点は、いずれも円筒埴輪とみられ、その特徴から上記した内堤上外縁の円筒埴輪列を構成していたものと考えられる。分析は科学研究費補助金基盤研究(B)「埴輪の生産・流通体制の総合的検証」にもとづく王権中枢部巨大古墳群造営過程の解明(研究代表者・廣瀬覚)の協力を得て、奈良文化財研究所にて実施した(東影)。

## 二. 対象試料と分析方法

佐紀古墳群東群の埴輪生産地としては、Ⅲ期の野焼き遺構とⅣ期の窖窯が検出された平城宮東院下層埴輪やウワナベ古墳への供給が確実視されている。両古墳にやや後出するヒシヤゲ古墳の埴輪が平城宮東院下層窯で生産されたのか否かについては、これまで検討材料が不足しており明確にされていない。胎土の分析値を比較することで、ヒシヤゲ古墳の埴輪が平城宮東院下層窯で生産されたものかどうかを検討する。平城宮東院下層窯については、野焼き遺構である一号窯(SX16285)、窖窯である五号窯(SX16280)を対象資料としたが、一号窯(SX16285)からは、コナベ古墳併行期と目されるⅢ群埴輪とウワナベ古墳と同型式のⅣ

## 目次

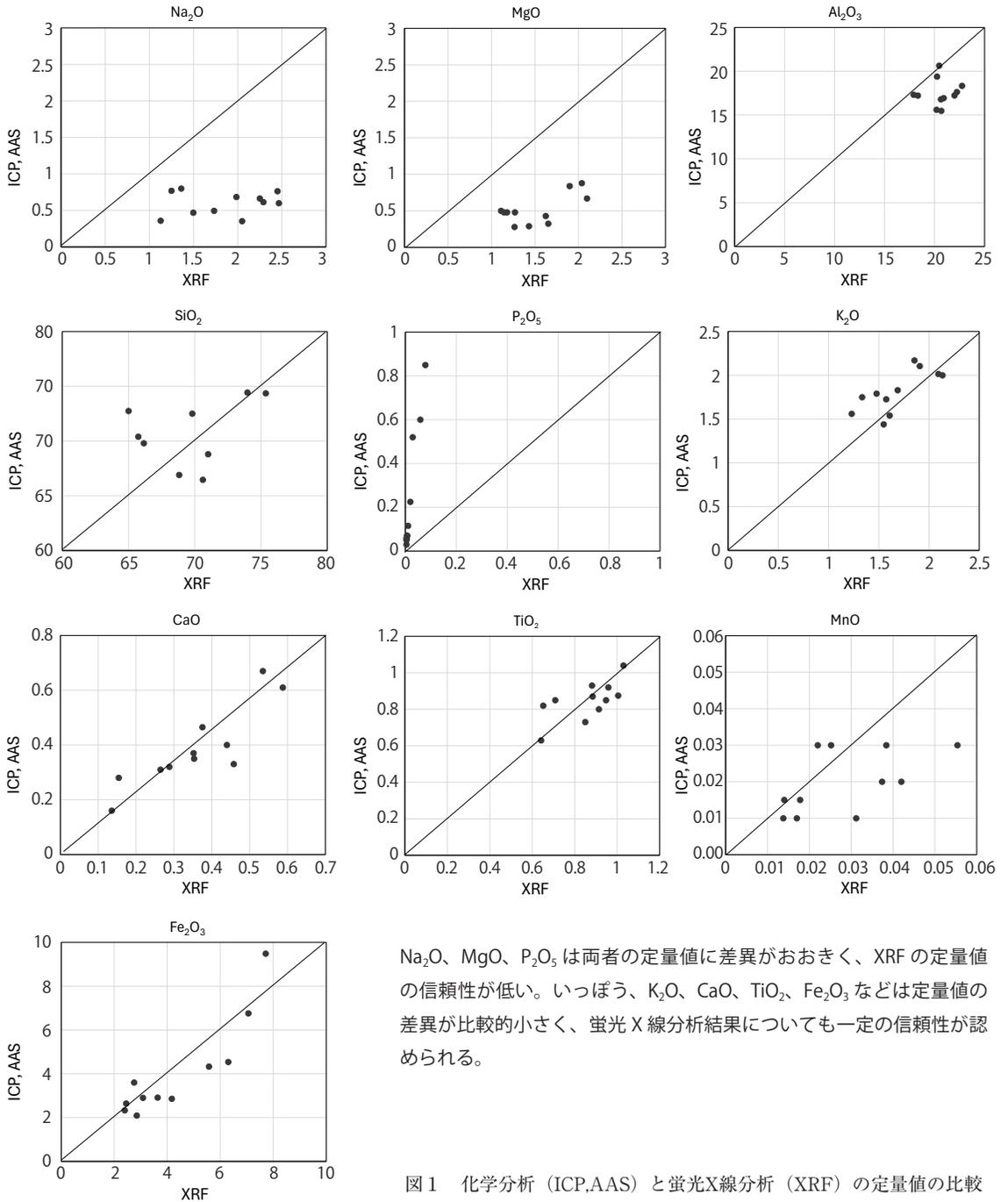
ヒシヤゲ古墳出土埴輪の胎土分析	東影 悠・廣瀬 覚・田村朋美・柳成煜	1
橿原考古学研究所における研修記	呉 東 堉	4
橿原考古学研究所研修記	李 姪 姫	6
中国派遣研修記	齊 藤 希	7
ひとの動き・アトリウム展示案内・附属博物館展示案内	編 集 者	8

群埴輪の両者が出土している。同一遺構からの出土ではあるが、これらは廃絶後のSX16285の窪地に生産時期を異にする資料が落ち込んだ結果と判断できるため、あらかじめ両者を区分して分析を実施した。分析は一定の精度を確保するため通常の蛍光X線分析に加えて、一部の資料に対して化学分析(ICP発光分光分析および原子吸光分析)を併用して実施した。ICP発光分光分析は、プラズマによってイオン化された試料中の元素を分光・検出する手法である。一般に、蛍光X線分析よりも高感度で、微量の元素を同時に定性・定量分析できることが特徴である。近年、考古資料の分析にも積極的に導入されるようになってきた。

ただし、実施にはそれ相応の費用を要するため、SX16285、SX16280、ヒシヤゲ古墳からそれぞれ二〜四点の試料を抽出して化学分析を実施し、それにもとづいて蛍光X線分析の成

果をクロスチェックし、全体のデータを解析することにした。サンプルは埴輪の形状を損なわないよう、断面からグラインダー(超硬カッター)で粉末状にして採取し、瑪瑙乳鉢で均一に細かく粉砕したものを試料とした。

化学分析は、日鉄テクノロジーに実施を依頼した。測定は、ICP発光分光分析(Inductively coupled plasma atomic emission spectroscopy)以下(ICP)法およびフレイム原子吸光分析(Flame Atomic Absorption Spectrometry)以下(AAS)法によりおこなった。使用した装置は、ICPはiCAP7400(サーモフィッシュャーサイエンティフィック製)、AASはZA3300(日立製作所製)である。具体的な測定方法は以下の通り。試料約〇.二gを白金のつばへ秤取り、硼砂融剤を加えて混ぜたのち、バーナーで溶融した。溶融生成物を塩酸と温水で溶解して一〇〇mlメスフラスコに移し、内部標準溶液(イット



Na<sub>2</sub>O、MgO、P<sub>2</sub>O<sub>5</sub> は両者の定量値に差異がおおきく、XRFの定量値の信頼性が低い。いっぽう、K<sub>2</sub>O、CaO、TiO<sub>2</sub>、Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>などは定量値の差異が比較的小さく、蛍光X線分析結果についても一定の信頼性が認められる。

図1 化学分析 (ICP,AAS) と蛍光X線分析 (XRF) の定量値の比較

リウム)を加えたのち、標線まで純水で定容した。定量方法は、SPEX製標準溶液を用いて、検量線を作成することにより定量値を算出した。蛍光X線分析は、奈良文化財研究所有のエネルギー分散型蛍光X線分析装置 (EDAX社製 EAGLE III) を使用して実施した。励起用X線源はRh管球、管電圧は三〇kV、管電流は一〇〇μA、X線照射径は五〇μm、計数時間は三〇〇秒とした。測定は真空中で実施した。測定結果は、測定試料と近似する濃度既知のガラス標準試料を用いて補正した理論補正法 (Fundamental Parameter method) 以下ではFP法)により、検出した元素の酸化物の合計が

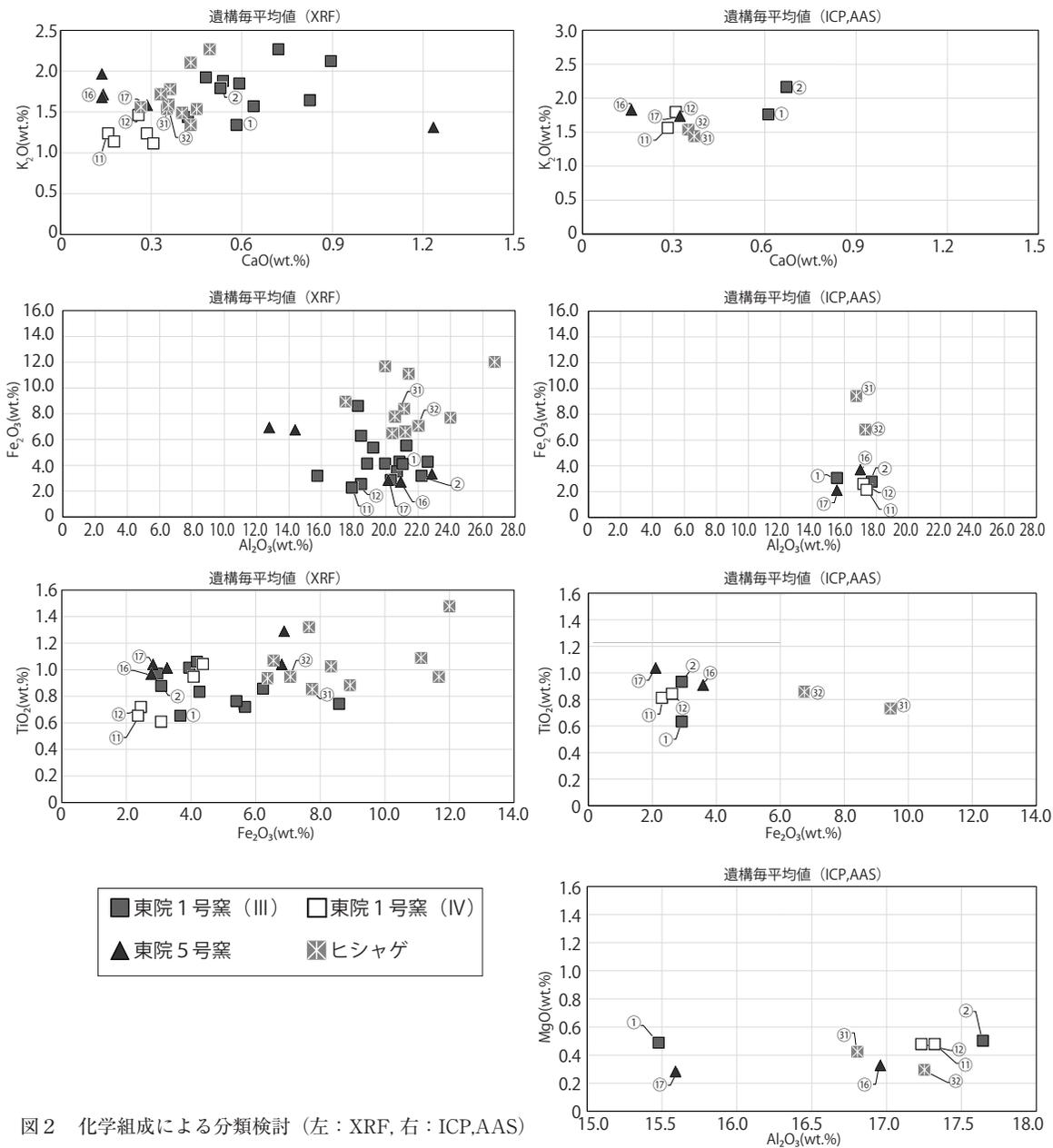


図2 化学組成による分類検討 (左: XRF, 右: ICP,AAS)

一〇〇%になるように規格化した。試料のバラツキと測定値の誤差を勘案し、一試料につき場所を変えて五回分析し、平均値を算出した。

### 三、分析結果

まず、蛍光X線分析によって算出された定量値の信頼性について、佐紀古墳群東群の関連古墳のデータも交えて化学分析の結果との比較から検討したところ、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>・K<sub>2</sub>O・CaO・TiO<sub>2</sub>・Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>などは定量値の差異が比較的小さく、蛍光X線分析結果についても一定の信頼性が認められた。一方で、Na<sub>2</sub>O・MgO・P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>は両者の定量値に差異が大きいため、蛍光X線分析の定量値を積極的に考察に利用することはできないと判断した(図1)。

図2はヒシャゲ古墳と平城宮東院下層窯(一号窯SX16285、五号窯SX16280)出土植輪の胎土について、先に信頼性を認め得るとしたAl<sub>2</sub>O<sub>3</sub>・K<sub>2</sub>O・CaO・TiO<sub>2</sub>・Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>の計測値をプロットしたもので

ある。一見すると、今回の対象試料は、各単位で明確に領域を区分できるような状況にないものの、プロット位置はそれぞれ一定の重なり合いをもちながらも少しずつ領域を異にする状況が認められる。平城宮東院下層窯のなかでも、一号窯SXI6285のⅢ・Ⅳ群、五号窯SXI6280のそれぞれの領域は少しずつズレを生じており、同一生産地のなかでも生産の時期や単位によって胎土の採取地が少しずつ変化した様子を示唆する。

これに対してヒシヤゲ古墳のプロット領域は、 $K_2O \cdot CaO$ の相関では一号窯SXI6285Ⅲ群と同窯Ⅳ群・五号窯SXI6280の領域の狭間に位置し、 $Fe_2O_3 \cdot Al_2O_3$  および  $Fe_2O_3 \cdot TiO_2$  では、平城宮東院下層窯のプロット領域から大きく逸れる状況がみとれる(図2)。

前述のように、胎土の採取地は同一地点で生産された埴輪においても時期や単位ごとに変化するものと目されるが、ヒシヤゲ古墳の胎土は平城宮東院下層窯の変異幅からも外れており、したがってヒシヤゲ古墳の埴輪は異なる別の窯において生産された蓋然性が高いといえる。

#### 四. おわりに

従来、平城宮東院下層窯については、同一地点において野焼きから窖窯への移行が確認でき、かつハケメパターンの一致や特徴的な鱗付円筒埴輪の存在からコナベ古墳、ウワナベ古墳といった佐紀古墳群東群の巨大古墳やその周辺への供給が確実視できることから、中期の拠点のかつ継続的な埴輪窯として評価されてきた。しかしながら、今回の分析により、佐紀古墳群最後の巨大古墳であるヒシヤゲ古墳については平城宮東院下層窯とは異なる窯で生産された可能性が見出せるようになった。この点は王陵級古墳を含む中期の巨大古墳群の埴輪生産の実態を考える上で極めて重要である。

佐紀古墳群西群では、生産時の残滓とみられる埴輪群の出土から、宝来山古墳が菅原東遺跡周辺、佐紀石塚山古墳が山陵遺跡周辺での生産が推定されていることを踏まえると、前期後半〜中期における王権中枢の巨大古墳群においても、埴輪の生産地は主たる供給地である盟主級古墳の近傍へと点々とその位置を移動していた可能性が浮上する。ヒシヤゲ古墳の埴輪も平城宮東院下層窯から供給されたものではないとなると、

同古墳の近隣に生産地が存在した可能性が見込まれよう。今後の調査の進展に期待するとともに、胎土分析にかんしてもさらに分析資料を蓄積し、ここでの見通しの蓋然性を高めしていく必要がある(廣瀬・田村・柳)。

#### 【参考文献】

小栗明彦一九九三「日葉酢媛陵古墳隣接地一次 日葉酢媛陵古墳隣接地二次 磐之媛陵古墳内堤発掘調査概報」奈良県遺跡調査概報一九九二年度(第一分

冊) 奈良県立橿原考古学研究所

小栗明彦・東影 悠二〇二二「ヒシヤゲ古墳の周庭帯と埴輪」考古学論攷」第五冊、奈良県立橿原考古学研究所

三辻利一・秋森秀己一九九二「菅原東遺跡出土埴輪の蛍光X線分析」奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成三年度

奈良市教育委員会

三辻利一・高場慎太郎一九九七「杉山古墳出土埴輪の蛍光X線分析」史跡大安寺旧境内I」奈良市埋蔵文化財調査研究報告第一冊、奈良市教育委員会

## 橿原考古学研究所における研修記

吳<sup>オ</sup>東<sup>ドン</sup>堉<sup>ソソ</sup>

#### 一. はじめに

二〇二四年六月三日から六月二八日までの一ヶ月間、「百済熊津・泗泚期と日本古墳・飛鳥時代の物質文化共同研究のための発掘交流実施協定書」に基づき、派遣研修を実施した。筆者は扶余研究所で百済後期の陵園に関する学術調査研究を担当してきた。公州・宋山里(現公州・武寧王陵と王陵園)と扶余・陵山里(現扶余・王陵園)古墳群の発掘調査を行いながら、百済後期の王陵に関する様々な学術研究を進めている。そ

のため、三国時代の百済の中央と地方の古墳、日本の古墳時代の中・後期の古墳との関連性に非常に関心がある。派遣研修期間中の主な目的は、奈良県の主要な古墳を実現して、さらに周辺地域の古墳はどのようなものかを確認することであった。期間中は、研究所の多くの方々からの助力を得た。また、木下亘先生と富加見泰彦先生は、和歌山県の古墳を案内してくださった。浜松市の古墳踏査では、浜松市博物館の鈴木一有館長が案内してくださった。大変お世話に

なり、深く感謝申し上げたい。

## 二、奈良県と周辺の古墳現地調査

奈良県一帯の古墳の現地調査でも印象深いのは、次の古墳である。

高井田山古墳は、日本の百済関連古墳をテーマにした論文でよく取り上げられていた古墳だったが、実見するのは初めてだった。古墳の位置と立地の特徴を正確に知ることができた。遺物だけでなく石室構造も公州王陵園一〜四号墳と類似している点が興味深かった。

南阿田大塚山古墳は、羨道が中央に位置し、小さな割石を使って石室を造っているため、奈良盆地の大型



浜松市 二本ヶ谷積石塚群  
(左 鈴木 一有館長 右 北井利幸所員)

古墳とは違いがあった。立地が和歌山市と奈良県を結ぶ吉野川の山の斜面で、交通路にかかわる古墳ではないかと考えた。

新沢千塚古墳群一・二六号墳は副葬遺物のうち、瓔珞装飾が興味深かった。百済・熊津期の公州・武寧王陵と慶州・チヨクセム四四号墳からも多量に出土した。百済漢城期のソウル・石村洞古墳群一号の埋葬儀礼でも確認されていることから、百済の漢城期から服を飾っていた金工品だったようだ。古墳の年代が六世紀前半ほどであることを勘案すれば、被葬者は当時の韓半島情勢と緊密に関与した人物と考えられる。

岩屋山古墳の石室は百済・泗泚期の石室のように玄室の断面を六角形にし、比較的よく整えられた数枚の板石を利用していた。他の石室は六角形になるように壁石を積んでいるが、そのほとんどが粗く磨いた石材を使用しており、この石室は今回の調査で見た石室の中で最も百済の泗泚期の石室と似ていた。いくつかの石室を実見したが、石室の中に石棺を使用した場合、艸墓古墳のように石棺の蓋石を六角形に整える様相があった。石室と石棺構造の相関性、あるいは百済・泗泚期の石室と

何らかの関係があるのではないかと考えた。

文殊院西古墳は、玄室の断面が方形であり、レンガのようによく整えられた石材を使って石室を造っていた。扶余・王陵園東古墳群の石室構造と類似した要素が多かった。

古墳以外に桜井谷窯跡群二・三三号窯跡の現場と出土遺物を実見した。普段から古墳編年のために須恵器窯と出土土器に関心があったが、焼成が完了した状況で廃棄された一括土器類を見ることができて非常に興味深かった。栄山江流域圏の須恵器系土器と比較した時、特定属性は似ているが同一ではない印象を得た。

その他、奈良県周辺では、和歌山県紀伊風土記の丘にある、独特な構造の石室を踏査することができた。

奈良県から八〇kmほど離れており、古墳の構造には明らかな違いがあった。石材をレンガのように均一な大きさに整えて石室を作る方式が武寧王陵を連想させた。静岡市の賤機山古墳は奈良県一帯の石室構造と類似しているが、玄室がより細長で、墓道施設が墳丘の外郭につながる構造が独特だった。浜松市では多数の畿内型石室を実見することができた。

## 三、おわりに

筆者はこれまで調査研究の目的で七回ほど来日したことがある。しかし、今回のように奈良県という一つの場所に一ヶ月間滞在したのは初めてだった。この研修で、約四〇基の古墳を踏査し、奈良県のあちこちを見ることのできた。文化財活用側の側面から、なるべく石室内部を確認できるように整備・管理する体制が印象的だった。学術的には、百済と日本の中心地の石室の構造変遷の流れが似ているかもしれないという印象を受けた。とくに石棺の蓋石を整える方法は、百済・泗泚期の石室の断面構造を連想させた。奈良県一帯の数多くの古墳の一部を見た感想ではあるが、古墳構造に時期や地域ごとの違いがあることを認識することができた。今後も百済後期の王陵学術調査研究を遂行していくが、今回必要となる多くの資料を収集でき、この分野を勉強するのに大いに役立つと思う。

一ヶ月間の短い研修期間だったにもかかわらず、親切に迎えてくださった檀原考古学研究所の所長をはじめとする職員の方々に、もう一度深く感謝の言葉を申し上げます。

# 檀原考古学研究所研修記

李<sup>イ</sup> 姪<sup>ジョン</sup> 姪<sup>ヒ</sup>

## 一、はじめに

今回の研修は七月八日から八月二日までの二六日間実施され、韓国と日本の古代文化と関連した発掘現場と共同調査研究を目的としていた。特に私は現在、百済の王宮と推定される扶余・官北里遺跡発掘調査団に所属しており、古代都城の区画と道路(網)の研究に関心がある。そのため、「条坊制」の導入による都城の構造変化を直接見て、さらに十分に進んだ研究データを収集できる日本への研修機会は、私にとって非常に楽しみになことであった。

## 二、博物館遺跡見学と遺物の実見

・平城宮と明日香村

研修第一週目には、ユネスコ世界遺産に指定されている平城宮跡を訪問した。現在は当時の建物が残っておらず公園として整備され、広い場所と所々に遺跡が残っており、残念な気持ちもあった。博物館での展示手法は興味と好奇心を引きだすものであり、見学が楽しかった。一方、日本の歴史で学んだことのある聖徳

太子・蘇我馬子・天智天皇の活躍の舞台であった飛鳥の踏査の日は、特に暑かったが、檀原より標高が高く山が包み込む明日香の地に入ってきたせいか、すっかり落ち着くような感じがした。石舞台古墳は雄大で、名称の由来もまた興味深いものだった。飛鳥のシンボルと紹介された様々な石造物のうち、酒船石遺跡の天理砂岩は当時も特別な意味を持っていたらしいが、特別な砂岩や亀型石造物は、それ自体が空間の閉鎖性とともに迫りくるようで、神秘的であった。

・京都訪問

早朝から始まった京都への踏査は、京都市内を一望できる建勲神社から始まった。平安京の条坊制によって組まれた道路を歩きながら、区画された所々に残った古建築物と歴史的建物、そして数多くの神社が、現代の建物と違和感のないように調和し、今の京都の景観を作っているようだった。加えて運良く見る事ができた祇園祭は、今回の京都訪問で意義深いものであった。このよう

な神輿を見られる日が人生の中で何回くらい廻ってくるだろうかという、そんな気がした。

・兵庫県訪問ー古代官道と駅家ー

兵庫県立考古博物館は、考古学専門の博物館らしく、遺物の展示と同時期に、考古学を理解しやすくするための多くの努力が感じられた。そのおかげで、私も、また初めて考古学に接した人たちも気楽に受け入れることができるような、新鮮な印象を受けた。暑い中本格的に始まった踏査は、私の関心あるテーマである官道と駅家を調べる行程で、現在残っている官道と駅家遺跡を移動しながら見ることができたことと、当時の発掘と研究を進めた岸本道昭先生と一緒に踏査に向うことができたこと、大変意義深い時間になった。山陽道から見える駅家規模の定型性を確認し、官道を直接歩きました。

・難波宮跡(大阪歴史博物館)訪問

韓国で官北里発掘調査団に属しているため、去年の発掘成果である南北方向の大型建物址についての手がかりとともに、その構造を探りたいと思っていた。遺跡は建物の基壇の一部が保存されていたが、韓国でも同じことがよくある、開発と保存の間での葛藤と妥協を示す事例だと感

じた。官北里遺跡の遺構とは完璧には対応していないが、実際に発掘・復元されている場所で類似する遺構の規模を実感することができた。

私が様々な地域と遺跡の現地調査を行って一番印象深かった点は、保存や復元に対する態度であった。保存状態を確実にし、地域市民の理解を得ること、それを通じて地域で文化遺産をうまく活用することの原則が立てられているようだった。遺跡調査から始まった復元作業が、このような資料館を通じて企画・常設展示、解説、ミュージアムショップにまでつながり、文化遺産の発掘と復元に対する学習の場になることができるのだと思った。

三、発掘調査現場参加(奈良IC)

現場は「平城京左京七条二坊」にあたり、京都から奈良盆地を貫く高速道路の建設にともなう発掘調査にあたる。その他の発掘現場もそうであるように忙しそうだったが、それでも発掘担当者の皆さんが互いに話し合っている姿がとても良かった。韓国と違い、発掘調査専門業者とともに調査を進めていること、低地帯であることから湧出水などを逃がすために、調査区域ごとに外郭に排水

路を回していることも興味深かった。実際に、古代道路の側溝の痕跡から、条坊制がより厳格に適用された古代日本の都の側溝に対する日本の研究者の理解（側溝は空間区分に焦点を合わせた施設であるという認識）についても、話を聞くことができた。



西浦熙所員から発掘調査の説明を受ける

## 中国派遣研修記

檀原考古学研究所と中国陝西省との交流は、例にもれず新型コロナウイルスの世界的流行の影響によりしばらく中断せざるを得なかった。今

### 四、おわりに

私の研修記は要約できないほど印象深いことが多かった。おそらくそれは私の初めての日本旅行でもあり、すでに本やイメージで分かっていた資料たちを実現したりしたこと余計に印象深くなったのだと思う。今回の研修を通じて日本の飛鳥時代から始まる日本の都城、宮城、遺物を多く見て、その研究に対する研究者同士の意見を共有することができた。私が研究所で研修ができたよう、ご配慮とご協力を賜った青柳正規所長、川上洋一副所長らに、厚く御礼申し上げる。また日本での生活と踏査をたくさん手伝ってくださった企画課の齊藤さん、北井さんにも、もう一度御礼を申し上げる。これから続く交流業務に少しでも役に立てることを願って、私の研修記はこれで終わりとする。

### 齊藤 希

年一月末に交流に関する包括協定の再締結を経てようやく派遣交流が再開し、私はその初めの研修に派遣していただけた機会を得た。今回は奈

良県の「奈良県陝西省専門分野交流事業」の一環として、二〇二四年二月二日から三月二四日の二九日間で、陝西省考古研究院に派遣研修を受け入れていただいた。私の研究分野は中国の初期王朝成立期の地域間交流であり、大学院在学中には北京大学に二年間留学をしている。また、現在は瓦の研究にも関心があり、本研修では、「東アジアにおける瓦の起源と瓦窯の構造比較に関する研究」をおこなうべく研修計画を立てた。この四年間で多少のプランクはあったものの語学面と生活面での不安はあまりなく、機関同士の交流再開後最初の研修に赴くことへのプレッシャーと、約一ヶ月の滞在中に自ら詰め込んだ過密スケジュールでの調査を完遂する体力があるだろうか、という不安だけがあった。

二月二五日、もうすぐ日付が変わるかという深夜に到着の便で西安咸陽空港に到着した。翌日は、まず交流座談会に参加して、種建築院長から研究院の組織紹介を受け、同時に私の自己紹介と研修期間中の目標を話す機会をいただいた。種院長いわく、研究院はこれまで考古学と保存科学の両輪で発展してきたおり、さらに昨年考古博物館を開館させたこ

とで、現在では、公開・活用を加えた三つの柱で成り立ち、それらの連携を深めながらさらなる発展を目指しているという。実際に、研究室や博物館、発掘現場を見学した際にも、このことを何度も実感することができた。

交流座談会後は、陝西省考古研究院の研究棟と考古博物館見学などをおこなった。以前の研究院は西安市内の大雁塔近くにあったが、ここ数年で西安市中心地から南へ離れた広大な土地に新設の博物館を含めた建物を建設し、移転を進めている。最も驚いたのは、天井にクレーンが備え付けられている巨大な部屋での遺構の室内発掘調査であった。中国ではこの十年ほどで、車馬坑や埽墓などの遺構を、遺構周囲の土ごと切り取り、補強して取り上げ、研究室に運び込み室内での発掘と整理作業をおこなう事例が非常に増えた印象がある。私が留学中参加した二〇一五年の周原遺跡の発掘調査でも、陝西省考古研究院によって車馬坑の切り取り・室内発掘作業がおこなわれ、発掘と保存処理を終えたその車馬坑は、現在陝西省考古博物館において展示されている。現地から二百km以上離れた博物館で本物が見

られることに感動すると同時に、予算面でも設備面でも想像を超える大掛かりな方法に、非常に驚かされた。

研修期間中には、西北大学文化遺産学院にもご挨拶に伺い、研究室等の見学をさせていただいた。以前榎考研で研修をされていた劉斌氏や孫麗絹氏らにも再会し、その後は西北大学の考古実習基地になっている旬邑県西頭遺跡の現場見学の調整などで、色々ご配慮をいただいた。

今回の研修では、陝西省考古研究院の李彦峰氏が、私の希望をふまえて研修行程全体の調整をしてくださったおかげで、陝西省内の多くの遺跡や博物館の見学をすることができた。周原遺跡や陶渠遺跡では、現場事務所でも報告資料を含めた瓦を見せてくださり、瓦の起源と展開に関して新たな情報が得られた。また、西安市近郊のいくつかの考古基地と発掘現場の見学を通して、調査と整理の方法や設備を知ることができた。

中国社会科学院考古研究所西安研究室の宋江寧氏にも、現地到着後に微信(Wechat)で連絡をとり、研究室訪問の機会を得た。宋氏が近年発表された新石器時代晩期の採集瓦を見せていただいた上に、ちょうど

宋氏の講義終わりで同席していた西安建築科技大学の学生とともに、古代建築と瓦に関する議論をすることができ、学びの多い時間となった。

週末や研修の合間には、科学研究費による調査をかねて、河北省と北京市・河南省洛陽と偃師・甘肅省蘭州・四川省成都など、様々な地方へ足を伸ばした。基本的には西安市内のホテルから地下鉄と高速鉄道に乗って移動したのだが、あらゆる支払いや高速鉄道の予約が今やすべてスマホのアプリで済み、現地の中国人は減多に現金を使用していなかった。便利になった反面、スマホの電源が切れたりインターネットに接続できなくなったりした場合には何もできなくなるリスクもある。私はお守りとしてモバイルバッテリーを常に二つ持ち歩いていた。

派遣研修中の日々は非常にめまぐるしく、何度か体力の限界を感じたものの、どうにか当初の計画がそれ以上の充実した内容で研修を終えることができた。できることならもう少し長く滞在したかった気持ちもあるが、私個人にとっては、幼い子どもへの育児真っ只中という自身の家庭を考慮すると、この短い渡航期間でちょうど良かったと思う。研修に

送りだしてくれた家族には、本当に感謝している。

短期間であったとはいえ、様々な場所に行くことができたおかげで、留学中の友人と久しぶりに再会したり、以前に榎考研で研修をされた方々と互いの近況を話したりして、中国の研究者の方々と旧交を温めることができた。また、新しい出会いも多くあり、どこへ行っても皆さんが友好的に親切に対応してくださったことが、非常に嬉しく思う。今回の研修で受けたご厚意に恩返しするために、今後の榎考研と陝西省との交流と共同研究の発展に尽力していきたい。



陝西省考古研究院 交流座談会集合写真

## ひとの動き

(転入 令和六年一〇月一日付)

杉原逸貴 広報広聴課主査

↓総務課主査

## アトリウム展示案内

研究所一階アトリウムでパネル中心に展示しています。今回は『再び輝き始めた藤ノ木古墳』を二月二七日(金)まで開催中です。詳細はホームページなどで公開しています。

## 附属博物館展示案内

特別陳列

「ミステリー小説のなかに

考古学が登場する件」

会期：令和六年二月一四日(土)

（令和七年一月一九日(日)

特別陳列

「東南アジアの洞窟遺跡」

会期：令和六年二月一四日(土)

（令和七年三月一六日(日)

特別陳列

「二上山にはじまりを求めて」

会期：令和七年二月一日(土)

（三月一六日(日)